第11号　平成11年2月

団塊（ワシら）のカタログ

トシタロー●グラフィティ

ローマの休日

恋愛映画には２種類しかない。

ローマの休日とそれ以外である。

山と空と雲を背景にパラマウント映画（A Paramount picture）の文字が画面に現れ、主演の**グレゴリー・ペック**（Presenting Gregory Peck）に続いて**オードリー・ヘップバーン**が紹介（Introducing Audrey Hepburn）され、彼女のデビュー作であることがわかる。

パラマウント・ニュース（これがわかる人はかなり古い）が、欧州最古の王国（ベルギー？）の若くて美しい**王女アン**がロンドン・アムステルダム・パリと、主要都市を親善訪問中であることを報道しているところから物語は始まる。（この数年後にＥＥＣ発足）

4番目の訪問地**ローマ**で、スケジュールにしばられる毎日に「もライヤッ！」とヒステリーをおこし、スカートとブラウスだけのフツーの女のコの格好で大使館をコッソリ抜けだし、夜のローマを一文なしでうろつく。

スネた時に注射された睡眠薬が効いてきたのか、うつらうつらしているところをアメリカの**新聞記者**（グレゴリー・ペック）に拾われ、アパートで別々に一夜を過ごす。

翌朝、目を覚ました王女が下半身をまさぐり乙女の無事を確認している頃、王位継承者の失踪に大使館はそりゃモウ大騒ぎ、とりあえず急病ということにしてしまえとなる。

そんなことなどつゆ知らぬ**記者**氏は寝坊して出社、デスクに思いっきり怒られる。

その時、突きつけられた新聞には「王女急病！」とあり、その横にその**王女**の写真が掲載されている。それこそ、昨夜拾ったあのムスメっ子ではないか！

「座ってよろしい」「お目にかかれて光栄です」などと言葉づかいがおかしいから、ただのプータローじゃないなと思ってはいたものの、まさか**王女**サマだったとは！

ヨの記者氏、ポーカーでボロ負けするわ、家賃は２ヵ月滞納するわでとにかく金が欲しい。

王女同伴の**ローマ観光**をスクープすれば良い記事に、いや、金になる。

というわけで、**記者**と**アン王女**のローマ観光にとストーリーは展開してゆく。

記者のアパートを出て、念願の自由を手に入れた**王女**、まず今までロングだった黒髪をバッサリと切って、**ショートカット**にし、さらに**アイスクリーム**（これがイタリアン・ジェラート）の**立ち食い**もする。

次にカフェーに行き、**ストロー**を包んである薄紙のケツをちょっと切って、口にくわえてその薄紙をプーッと飛ばして喜ぶ。（この映画から当時の若い女性＝今の60才デコボコ＝がマネし、現在に至っている）

そのカフェーで、**記者**は悪友の**カメラマン**と出会い、ライター型かくしカメラで**王女**が初めて吸う**タバコ**のシーンを撮影させる。

カフェーを出た２人はスクーターを相乗りし、その後を**カメラマン**氏が追いかけ、スナ

ップ写真をビシバシ撮り続ける。

王女が**スクーター**を自分で運転したり、コロセウムの**真実の口**に手を突っ込んだりのエピソードがおりこまれ、美しい（時にはゴミゴミした）**ローマ**の街並が紹介されてゆく。

夜になり、**王女**と**記者**と**カメラマン**の３人は船上パーティーに出かけるのだが、そこをついに秘密警察の男たちに見つけられてしまう。

多くの恋愛映画は終盤近くになると大騒動になり、それをなんとか切り抜けた後で主人公の２人がブチューと口づけを交わすことになっているが、もちろんそうなる。記事と金が目当てだった**記者**もこれまた期待を裏切らず、いつしかマジに**王女**を恋してしまう。

２人がアパートに帰り、ラジオをつけるとなんともタイミング良く**王女**の失踪を放送している。本当の身分を**記者**が知らないと思い込んでいる**王女**が「帰らなくっちゃ」と言えば、そんなことは百も承知の**記者**はクルマで送る。最後に２人は車中で別れのキッスをするのだが、**王女**は大使館を横目でうらめしそうにチラっと見る。（車中のラブシーンは同じでも、**タイタニック**とはだいぶちがう）

大使館に戻った王女は、自分の意見をはっきり言えるオトナにすっかり生まれ変わっていた。

祖国と王家への責任と義務を訴える大使に「私にむかってててそのことを２度と言わぬように。それだからこそ戻ってきました。忘れはしません」と、涙をこらえながらも健気に答え、周囲の人間を驚かす。

それどころか、あれほど嫌がっていたスケジュールについても、「今日（12時を回っている）は予定の行事が沢山ありますよ。早く休みなさい」と、お供の者を気遣う余裕さえみせる。（女の変わり身は早くて恐ろしいという見本である。男だとこうはいかない）

寝る前の習慣になっているミルクとクラッカーをキッパリと断る**王女**、あまりの変化に世話やきババァの伯爵夫人は驚く。

一方、**記者**は**王女**とのことは胸の内に秘め、記事をあきらめる決心をするが、**カメラマン**氏は納得しない。何しろ、写真は傑作ぞろいだ。

初めてのタバコ＝慣れない手つきで生まれて初めてのタバコを吸う**王女**

真実の口＝ウソつきは手がチョンぎられるという伝説の「石の面」にコワゴワ手を入れる**王女**

望みの叶う壁＝叶うわけないと知りながら目をつぶって何かを願う**王女**

王女尋問される＝スクーターの無免許運転で警察で尋問される**王女**

王冠の一撃＝連れ戻そうとする秘密警察官をギターでブッとばす**王女**

そして、**王女**が記者会見をする最後の10分がこの映画の見せ場である。

会見場にいる多くの報道陣の中にあの２人の姿を見た**王女**は、驚きながらもすべてを理解する。

諸国の友好関係について質問された時「国と国の友情を信じます」とブナンな答弁をしたのだが、突然「人と人の友情を信じるように」と付け加え、周囲をあわてさせる。

これに**記者**氏が「当社を代表して一言。王女さまの信頼が裏切られることはないでしょう」と応じ、昨日の恋と冒険を自分の胸にしまっておく決意をにおわせる。

「どこが一番印象的でしたか」と記者団にたずねられる王女、ブナンに答えるように家来に言い含められているのだが「どこの国も‥‥いえ、**ローマ**です」と答える。公式発表では急病だったというのに、なぜ？

侍従はあわて、場内にザワメキが広がる。

続いて記念写真を撮ることになり、**カメラ**

マンはライター型カメラを**王女**に見せ、ニヤッと笑い、今までのスクープ写真を渡す。

一瞬あわてる**王女**だが、最後のシーンでは涙をこらえながらも精一杯ほほえむ。そのいじらしさと美しさには感動すら覚える。

☆

5年後に**ベン・ハー**でアカデミー賞史上最多の11部門を受賞したウイリアム・ワイラー監督の軽い恋愛映画だが、しゃれた会話と小粋な展開はさすがで、当時24才の**オードリー・ヘップバーン**がこのデビュー作で1953年度のアカデミー主演女優賞に輝いたのもトーゼンなら、文句なしの代表作にして歴代映画のベストテンには必ず選ばれる超のつく名作であることは間違いない。

大きい眼と横に広いお口のその顔が**ファニー・フェイス**という流行語にもなった。

原題はRoman Horiday ロマン（チック）ホリデイ、ロンドンでもパリでもアムステルダムでも具合悪いのも納得する。

恥ずかしながら、最後の10分間はなんべん観ても泣いてしまう。恋人たちは結婚前に見るべし。映画史上最大最高の恋愛映画。

オズの魔法使い

ライザ・ミネリのお母さん、**ジュディ・ガーランド**のデビュー作である。

「風と共に去りぬ」でおなじみのMGM作品だが、レオ君がガーオと吠え、これに応えるように「虹の彼方に」が流れる。

カンサスの田舎道を**ドロシー**（ジュディー・ガーランド）がワン公（トト）を連れてスキップしているところから物語は始まる。

そこに変なババァが突然現れ、トトにかまれたと言ってショッ引いていくのだが、ワン公もサル者、さっさと逃げて帰ってくる。

このままではまた連れて行かれると思った**ドロシー**は家出する。途中で怪しげな教授にお説教されて家に戻るのだが、ついた途端に竜巻で飛ばされて来た窓枠に頭を打って気を失ってしまう。

目が覚めて外を見ると、どうやら家ごとブッ飛ばされているらしいが、それでもどこかに無事軟着陸し、コワゴワ外へ出る。

ここまでザッと30分、今まで白黒だった画面が一歩外に足を踏み入れるやいなや、背景も人物もなにもかもがカラーになる。

この白黒・カラー入れ替えパターン、題名は忘れたが**植木等**の**無責任シリーズ**がパクッたことがあって、便所でションベンをするのがキッカケという下品なものであった。

それはさておき、外は東京ディズニー・ランドのスモール・ワールドのような、わざとらしい人工のセットが散りばめてある。

ここはどこだろうと思う間もなくそこに良い魔女が現れ、飛ばされて来た**ドロシー**の家が偶然にも悪い魔女を押しつぶしたことを教えてくれる。魔女にイジメられていた小人のマンチキンたちはそりゃモウ大喜び、歌って踊って**ドロシー**を歓迎する。

そこに死んだ魔女の妹の西の魔女が現れ、姉のルビーの靴を取り返そうとするが、そうはさせじ、オヤジはイボジとばかり、良い魔女が**ドロシー**に靴をはかせる。

西の魔女は逃げ口上と捨てゼリフを目一杯並べたて、赤い煙と共に消えてしまう。

もうこんな所イヤ、カンサスに帰りたいと**ドロシー**が良い魔女に訴えると、黄色いレンガの道をたどって**エメラルドの国**に行き、そこで**オズの魔法使い**に会えば良いと言う。

途中ノーミソのない**カカシ**と心のない**ブリキ男**と意気地のない**ライオン**のナイナイ・トリオに出会

い、一路**エメラルドの国**へと向かう。

カカシは脳ミソを、**ブリキ男**は心を、そして**ライオン**は百獣の王にふさわしい勇気を、**オズの魔法使い**から授かりたいのだ。

こうして、イヌ・サル・キジを連れて鬼が島へ向かう桃太郎か、サル・ブタ・カッパをお供に天竺を目指す三蔵法師のごとく、**ドロシー**たちの冒険旅行が始まる。

道中、ジャマをする悪い魔女をキッチリやっつけたりして、いよいよマチカネフクキタルの**オズの魔法使い**とご対面する。

そして、今までの冒険の中で**カカシ**は脳ミソを、**ブリキ男**は心を、**ライオン**は勇気を既に身に付けていることを聞かされ、その**オズの魔法使い**にしたってフツーの門番のオッさんだっちゅーこともわかる。（このあたりのせこいオチ、銀河鉄道999がパクっている）

さて、**ドロシー**。ルビーの靴のカカトを3回打ち合わせながら「おウチほど良いところはない」と心に思い続ければ、あの懐かしいカンサスへ帰れると教えられる。

画面は再び白黒へ。どうやら今日の出来事は気を失っている間に見た夢だったようだ。

目を覚ました**ドロシー**を心配そうに見守ってくれている近所のおじさんたちこそあの**カカシ**と**ブリキ男**と**ライオン**ではないか！

「おウチほど良いところはないワ」と、トトを抱きしめながらつぶやく**ドロシー**、身近なところに幸せや望むものはあるのに、ただそれに気がつかないだけなのだと、文部省推薦のタメになる結論にたどりつく。

☆

ストーリーは他愛もないし、幼稚な特撮ばっかりであるが、驚くのはこれらすべてがスタジオで収録されたことだ。

それ以上に、当時14才の**ジュディー・ガーランド**の歌唱力と可愛らしさに脱帽である。

同じ年齢だと、日本ではスピードかモーニング娘の誰かってか？

タイトルの**OZ**であるが、2分冊の辞典の上巻がA～Nで下巻が**O～Z**となっていたところからだそうだ。（こういうオチ大好き）

ゴジラ

いい忘れたが、今号はワシらがピカピカの1年生になった**昭和29年**に日本で封切られた映画特集である。（製作年度ではない）

記念すべき**ゴジラ**の第1作も封切られた。水爆実験で200万年の眠りを覚まされた原始怪獣**ゴジラ**が頼みもしないのに起こしやがった人間に復讐するというのだが、だったらちっぽけな島国日本に来ないで広いアメリカかソ連へ行けとマジ思ったものである。

200万年もたてば化石になるか風化するかだし、爬虫類は水中では生きられない。

被爆すれば目覚めるどころか死ぬ。いきなり大型化したのはなんでか、放射能を製造する内臓はどこか、食いモノは寝ぐらはといったらキリがないが、怪獣映画に理屈、娼婦に純愛、政治家にモラルを求めてはいけない。

ブリラとクジラから**ゴジラ**と命名されたらしいが、その後登場する怪獣のネーミングに**ラ**の字と**濁音**はつきものになる。

ラドン・ガッパ・ギャオス・レギオン・キングギドラ・バトラ・アンギラス・エビラ・クモンガ・ヘドラ・マンダ・モゲラ・バルタン星人といった具合であるが、これが濁音のないモスラやミニラになると音感も優しくなり、良いコの味方になるから不思議である。

モス（moth）はガのことだがガラじゃ変だし、カメだからってカメラじゃ何とも情けない。第1作は偉大である。